

「命とは、みんなが持っている時間のこと」の教え

日野原重明先生（聖路加国際病院・名誉院長）が、ご高齢（94歳）をいとわずに、「いのちの授業」を全国の小学校で巡回授業していることは、既にみなさんもお承知のことと思う。

先に氏の巡回授業のことは新聞で読んでいたが、先日仙台の小学校でも授業を行い、そのことがTVのローカルニュース、地元紙でも報道された。

氏は、「心臓は生きるために必要だけど、そこに命があるわけじゃない。命とは、みんなが持っている時間のことです。今は、時間を自分のためだけに使っているでしょう？これからは、時間を誰かのために使って下さい。」と子どもたちに語りかけている。

自分は少し緩和ケアに係わっているので、少なからず当事者の書籍等も目にしてはいるが、そこには「残り少ない命と知って、これからは一瞬、一瞬を大事に生きたい」との趣旨の表現を少なからず目にする。

命とは時間の長短をいうのではなく、正に氏の云わんとする「その時間をどう生きるか」ということであろう。

氏の問いかけからすれば、願わくば、がんを患う前から、そうした気持ちで日々を過ごしてもらいたかったということか…。

更に、氏は「人のためにできることを考え、自分以外の人役に立つように時間を使って欲しい」と語りかけることから、人を思い遣る気持ちが戦争をなくし、世界平和につながると説いている。

子どもの自己肯定、自己確立、アイデンティティー等の自分育ちは、友人等との係わり合いの中で育って行くものであることからして当然とは言え、子どもたちにも理解し易いことと思う。

我々大人には、往々にして「他人事に、我、関せず！」の人が多いだけに、氏はそうした大人にはもう期待はできず、次世代を担う子どもたちに世界平和を託したい故に、巡回授業を実践しているのかなあ…。

子どもに限らず、我々大人とて、人との係わり合いの中で、少しは人に役立っていると実感するところからこそ、自らのアイデンティティーは自覚されると思うだけに、氏の問いかけを真摯に受け止めたい！

昔からある「一日一善」という言葉は、「時間を人のために！」という教えも込められているのかも…。

（2006年6月23日 記）